

教師をナイフで刺した非行少年の人格査定： ロールシャッハ・テストと TAT の所見に着目して

齊 藤 文 夫

Personality Assessment of a Juvenile Delinquent Who Stabbed His Teacher with Special Reference to His Rorschach and TAT Responses

Fumio SAITO

要 約

女性教諭をナイフで刺し、殺人未遂事件で少年鑑別所に収容された高校生（男子、18歳）の人格特性及び本件の心理力動を、ロールシャッハ・テスト及び TAT 所見を踏まえて、事例研究的に考察した。ロールシャッハ・テストでは、 $R = 13$, $\text{IntRT. ave.} = 34 \text{ sec.}$, $W\% = 69\%$, $W : D = 9 : 1$, $(Dd+S)\% = 23\%$, $F\% = 62\%$, $\text{SumF}\% = 100\%$, $F+\% = 50\%$, $\text{SumF}+\% = 46\%$, $M=0$, $\text{FM}=0$, $\Sigma m=0$, $\text{FC}=3$, $M : \text{SumC} = 0.0 : 1.5$, $\text{FC} : \text{CF}+C = 3.0 : 0.0$, $(\text{VIII}+\text{IX}+\text{X})\% = 31\%$, $(\text{FK}+\text{F}+\text{Fc})\% = 77\%$, $A+Ad=2$, $H+Hd=2$, $Lds=1$, $\text{Map}=1$, $\text{Food}=4(+1)$, $\text{CR}=7$, $P=2$, $\text{Failure}=2(\text{V}, \text{VII})$, $\text{mod. BRS}=-26$, などの結果を得た。対人場面での共感性の欠如、常識的な思考の欠如、特異な観念的思考、妄想様の外界把握、強い口唇欲求などが示唆され、自我の現実吟味力はいちじるしく脆弱と思われた。TAT では、さまざまな原始的防衛機制（分裂、価値下げ、原始的理想化、万能感幻想）と知性化、父母イメージの悪さ、奇矯な自己像、性愛幻想、幼児的口唇欲求、未分化な衝動性・破壊性などがうかがわれた。人格は「境界性人格障害の疑い」と査定されたが、人格水準はいわゆる境界例以下で、精神病水準に近接すると思われた。そうした偏倚な人格の少年が、性愛幻想と幼児的・口唇的欲求から女性教諭に依存し、見捨てられ不安が昂じて本件非行に結びついたものと考察された。

キーワード：非行少年，境界性人格障害，ロールシャッハ・テスト，TAT

第1節 はじめに

女性教師をナイフで刺し、殺人未遂で逮捕された男子少年（高校3年生）を取り上げる。この事例の人格や心理力動を、少年鑑別所で施行された心理検査（ロールシャッハ・テスト及びTAT）の所見を踏まえつつ、事例研究的に考察する。

この事例は、現代のマスコミ用語でいえば、「ごくフツ」の少年がある日突然「キレた」ということであるのかもしれない。しかし、現実にごうした事件を起こした少年を少年鑑別所で調査すると、さまざまな心理的な問題性が潜在していることがうかがわれ、「ごく普通の少年」ともいえないことが多い。そうしたことを、この事例の心理検査のデータを通して考えてみたい。

なお、個人が特定されるのを避けるため、事例に関する情報を秘匿又は虚構化した。資料のうち、ロールシャッハ・テスト（資料1）とTAT（資料2）は、反応の要約（プロット）を提示した。参考資料として、法務省式文章完成法（SCT）、バウム・テスト、風景構成法の結果を添付した。ただし、SCT（資料3）の反応は、一部を秘匿した。バウム・テスト（資料4）と風景構成法（資料5）は、原図ではなく、筆者による作画である。

ところで、我が国における少年による殺人事犯は、戦後2度のピークがあった（1951年と1961年。本件罪名殺人による少年刑法犯検挙人員が、いずれの年も448人）。1961年以降、少年による殺人は漸減し、1975年には年間検挙人員100名を切り、最近においては年間70名ないし100名くらいの水準で、顕著な増減もなく推移している。近年、少年の凶悪犯罪が激増していることが報道されている。しかし、少なくとも殺人に関しては、戦後のピーク時に比べれば4分の1ないしそれ以下の水準で、ほぼ安定的に推移している。（数字は、法務総合研究所（1999）による。）

そうした殺人事犯少年の実像に迫った実証的な研究はあまりない。科学警察研究所の渡邊・田村（1998）は、1990年から93年にかけて検挙された殺人事犯少年（傷害致死を含む）117例の資料を収集・分析し、以下の結果を得た。殺人事犯少年の男女別は、男子97人（82.9%）、女子20人（17.1%）。何らかの非行前歴のある者がほぼ半数（44.4%）で、保護観察中であった者（13.7%）、少年鑑別所入所歴のある者（9.4%）、少年院入院歴のある者（6.0%）も含まれている。有父率がかかなり低く（全体で70.9%。年少少年にかぎれば47.8%）、父親がいる場合でも、その父親に暴力・ギャンブル・大酒・浪費などの問題行動が多い。事件類型としては、けんか型（31人、26.5%）、親族殺型（30人、25.6%）及び集団暴力型（22人、18.8%）が圧倒的に多く、次いで、性関係トラブル型（12人、10.3%）や精神障害型（10人、8.5%）などが続く。

法務総合研究所の山口・浜・西田（1991）は、1986年から89年にかけて本件非行名殺人（未遂を含む）で少年鑑別所に収容された少年191人に関する鑑別資料を収集・分析し、以下の結果

を得た。191人のうち、男子は162人(84.8%)、女子は29人(15.2%)で、出身地は関東(37%、甲信越静を含む)と近畿(21%)が多い。普通少年(補導前歴のない少年)は70人(36.5%)で、素行不良少年(73人、38.2%)又は暴力団関係少年(47人、24.6%)が多い。普通少年の有父母率は比較的高い(67%)が、全体では父母の揃った少年は約半数(54%)。学職別では、学生生徒30%(中学生11%、高校生13%、その他6%)、有職少年29%、無職少年41%。さらに、鑑別結果から殺人少年の人格を類型化すると、以下の4類型が見い出された。

- (1) 積極型：外向的で自己主張・自己顕示が強く、友人も多いタイプ。自己愛や万能感が強く、かつ未熟な自己中心性が顕著で、共感性が育っていない。実父母健在で、経済的にも中位以上の家庭が多いが、保護者の養育態度は過干渉的。
- (2) 消極適応型：内向的・消極的なタイプ。他者とは波風を立てずにやっていくが、主体性を欠き、従属的。このタイプは、家庭内に葛藤を抱えており、親族を対象にした殺人が多い。
- (3) 弱小型：弱々しく、集団場面では孤立しがちで、適応できないタイプ。いじめにあいやすく、被害感をうっ積させている。家内窃盗や万引きなどの前歴を持つ者が多い。殺人をやり遂げるには力不足で、未遂事犯が多い。家庭的には、恵まれていない者が多い。
- (4) 拘泥型：性格の偏りがいちじるしいタイプ。ものの感じ方や考え方に主観性が強く、融通がきかない。困難に直面すると視野狭窄となる。対人関係のあり方は弱小型に似ているが、マニアックな趣味を持っていたりする。内心には強い自負心を持つが、何らかの挫折体験を味わっている。家庭の経済文化水準は比較的高く、親の期待に答えて「いい子」を演じてきた者に多い。

こうした先行研究から、少年による殺人には、親族型、けんか型又は集団暴力型が多いことが分かる。学校教師をねらった本事例は、例外的なものであるといえる。先行研究は殺人事犯少年の有父率や有父母率がかなり低いことを見出ししている。しかし、本事例にあっては、両親健在であり、その意味では「普通家庭」である。本事例はまた、本件以前に補導歴がなく、万引きや家内窃盗などもなかったもようで、その意味では「普通少年」に該当する。先行研究の類型にあてはめると、渡邊・田村(1998)のいう「精神障害型」に近く、山口・浜・西田(1991)のいう「拘泥型」又は「弱小型」に近いものと思われる。

本稿では、以下に、事例の概要・家族歴・生育歴(第2節)を示し、ロールシャッハ・テスト所見(第3節)とTAT所見(第4節)を述べる。それらをふまえて総合的考察(第5節)をまとめる。

第2節 事例概要・家族歴・生育歴

1 事例概要

事例： 少年 A（男子，18歳）

(1) 本件非行： 殺人未遂・銃砲刀剣類所持等取締法違反

警察調べによれば、本件の概要は次のとおり。かねてから指導を受けていた女性教諭（当時40歳）の自宅に赴き、話し合ううちに口論となり、激昂し、とっさに同女を殺害しようと決意、所持していたナイフ（刃体長、約12センチ）で同女の左側腹部を刺し、腹部刺創による腹腔内出血の傷害を負わせたが、殺害の目的を遂げなかったもの。なお、事件後、腹部を刺された教諭は、すぐさま自分で119番に電話し、一命をとりとめた。

少年鑑別所における面接で、A少年は事件の動機について「先生がカウンセラーとしての責任をとってくれなかったから（事件が起きた）。ぼくの話聞いてくれなかった先生に責任がある」と供述し、自分には責任はないことを主張した。A少年はさらに、「先生がぼくとの話し合いを拒否した。ぼくの話聞いてくれないので、それなら『自分を刺す』とナイフを持ち出した。そのとき、先生がぼくを突き放すようなことを言った。ぼくは何が何だか分からなくなった」と語り、教諭と揉み合いになったこと及び教諭をナイフで刺したことは認めたが、殺害する意思ではなかったと述べた。

(2) 知能及び性格特性：

知能については、知能検査所見及び面接所見を総合して、普通程度と判定される。集団検査（新制田中B式）では、IQ=85。個別検査（WAIS）では、言語性IQ=117、動作性IQ=84、全検査IQ=102。個別検査の結果が臨床像と合致する。言語性知能と動作性知能との差が大きく、前者が後者よりかなり優れていることが特徴的である。（たいていの非行少年の場合、この逆であることが多い。）

性格特性について、鑑別結果には、次のように記載されている。一見おとなしく見えるが、ものの考え方はきわめて自己中心的で、他者への共感性に乏しい。神経質で、ささいなことにこだわる。内心に強い劣等感を抱く。対人関係の在り方は、幼児的ともいえる依存性を秘めており、依存対象にしがみつき、依存欲求が満たされないと攻撃的感情を高める。

(3) 精神障害： 境界性人格障害の疑い

少年鑑別所では、精神科医師による診察も実施した上で、上記のとおり判定された。なお、A少年は、本件以前にも精神科を受診しており、そこでの診断は「思春期境界例」であった。また、本件後、検察庁で簡易な精神科診察を受けており、そこでは「精神分裂病」と診断された。

2 家族歴

Aの父方祖父は、某都会地において手広く商売をしていた。祖父は、商才があり、気性の激しい人でもあったらしい。祖父は既に死亡しており、祖父の死亡後、家運は傾いている。父方祖母も既に死亡している。祖母は、商家の妻としてがまん強い女性であったというが、子どもには口うるさい母でもあった。Aの父は、そうした祖父母のもとで、3人同胞の末子として生まれた。兄たちに比べるとおとなしく、同胞中では軽く扱われることが多かったという。父はまた、幼少期には「おばあちゃんっ子」であった。

父の同胞は次々と独立していったが、父は実家に残り、祖父の商売を手伝っていた。祖父の死亡するころ、親戚の紹介で、母と見合い結婚する。35歳であった。

Aの母方祖母の実家は、某地方都市で飲食業を自営していた。祖父は調理の腕を見込まれ、入り婿として祖母と結婚した。そうした祖父母のもとで、Aの母は3人同胞の末子として出生した。祖父はAの母が生まれて間もなく兵役に就き、戦死した。そのため、戦後、祖母は飲食業を続けることができず、内職などで3人の子どもを育てあげた。祖母は気性のきつい女性であったという。祖母は、現在も、その地方都市で内職をしながらひとりで生活している。

Aの母は、中学校卒業後、都会地に出て事務員などをしていた。何回かの見合いを経て、Aの父と見合い結婚する。28歳であった。

Aの父母の結婚は、1970年代のことであった。結婚後、父は、祖父が死去したこともあり、実家の商売を廃業して会社員となる。結婚3年目に、Aが出生する。その後、母親は何度か流産している。したがって、家族は父母と一人息子であるA少年の3人である。

3 生育歴

妊娠中はつわりがきつく、流産しそうになったこともあったが、無事に熟産までこぎつけた。出生時は鉗子分娩であったが、特に異常なし。生下時体重3400グラム。母乳が少なく、人工乳に頼ることが多かった。幼児期には、身体が虚弱で、かぜをよくひいた。発語が（近所のこどもに比べて）やや遅かったという。

Aは、小学校時代に、小児ぜんそくを発病。虚弱で、いじめられっ子でもあったらしい。しかし、仲良しの友達もいて、主に家の中で遊んでいた。

中学校入学後も、ぜんそくでしばしば欠席した（通年の欠席日数は約20日）。少数の友人があり、室内ゲームなどの遊びをしていた。勉強は、英語を熱心に勉強した。

中学2年に進級。ぜんそくの発作は、次第に消失した。2学期ころ、「いじめ」を受けたことがきっかけで、不登校が始まる。このころ、強迫行動とも思われるふるまいが発現した。自宅での用便時、大量のトイレトペーパーを消費したり、手洗いを頻繁に繰り返すようになったという。また、母親に暴力を振るうようにもなった。中学校教師が家庭訪問して指導した。母親は中

学校の紹介で児童相談所その他の公的な機関に相談に行ったが、少年本人は相談に行こうとしなかった。そのため、いずれも2、3回の相談で中断したという。

中学3年に進級。再び登校を始める。家庭内では、母親への暴力がさらに執拗なものになっていった。

Aは、中学校を卒業し、高校に進学。このころ、母親はAの暴力に耐えかね、体調を崩すなどしたため、祖母の住む地方都市の実家へ逃げ帰ってしまう。同じころ、父親は、夜勤の仕事に転職する。父親とA少年のふたり暮らしが始まり、家庭内暴力はおさまる。以後、本件まで、父子のふたり暮らしが続いていた。

高校2年に進級。「いじめ」がきっかけとなり、不登校ぎみとなる。その後は、いわゆる保健室登校の状態となった。

高校3年に進級。卒業に向けての生徒指導をきっかけに、女性教諭（本件被害者）から個別的なカウンセリング指導を受け始める。この指導により、状態はいちじるしく改善され、本人は毎日登校するようになった。しかし、次第にその教諭との関係がこじれていく。教諭の自宅へ長電話を繰り返す、自宅に押しかけて面談を強要する、いっしょに喫茶店や映画館へ行くなど、「限界」のない関係になっていったようだ。

高校3年の秋ころ、指導に苦慮した教諭は、そのことを教頭らに報告するとともに、Aの保護者に対しても精神科への受診を強く勧めた。Aは学校関係者や保護者に説得され、一度は精神科を受診した。このときの診断は、「思春期境界例」であった。しかし、精神科医師による治療は継続せず、その後、さらにカウンセリング関係がこじれていった。教諭の眼前で、駅のホームから電車の線路に飛び降りたり、自分の手首をナイフで切るといった行為があったという。こうした状況において、本件が惹起された。

第3節 ロールシャッハ・テスト所見

1 反応時間・領域・決定因・内容など

(1) 反応数・反応時間

R=13と、反応数が少ない。IntRT. ave. (初発反応時間平均)=34 secであり、初発が遅い。これらのことから、心的なエネルギー水準の低下、抑うつ傾向、あるいは防衛的な構えの強さを考えることができるだろう。ロールシャッハ図版のようなあいまいな刺激に対して、柔軟な対応ができない人でもあろう。

(2) 反応領域

W%=69% (W=9)である。反応数は少ないが、全体反応率は高い。具体的な個々の事物には関心が向かず、観念的・抽象的なものの見方になりやすい。知的な関心も強く、能力以上に背伸びをする傾向があるのかもしれない。

III 図における dr, IV 図における di は、いずれも形態水準が低い。独特かつ特異な外界把握の傾向、あるいは妄想様のゆがんだ認知傾向を示唆する。外界把握の客観性や現実吟味力に問題がありそうだ。

VI 図における 3 つの Wc は、知的な鋭さや批判力というよりも、自分にとって不都合なものを排除し、否認しようとする防衛機制を示すとみられる。(これらの Wc は、不都合なものを「切り捨てる」「切り取る」といった意味づけも可能であり、未分化な攻撃性を示唆するのかもしれない。)

(3) 形態反応

F% = 62%, SumF% = 100%, F+% = 50%, SumF+% = 46%。これらの数字から、形態優位型といってよい。「かたち」だけに目を向けやすく、情緒性の乏しさや平板化した感情状態がうかがわれる。F+% = 50% で、形態水準は全般的にやや不良である。外界の「かたち」を見ることはできるが、現実吟味力に乏しく、柔軟かつ適応的な対処ができない。FC 反応で形態水準が落ちており、情緒的な刺激にはうまく対処できないようだ。

(4) 人間運動反応

人間運動反応は、健常者であれば 4 個くらい、犯罪者や非行少年でも 2 個くらいは産出される。ところが、それが全く欠けている。人間運動感覚が全く欠如していることから、対人的な情緒性に乏しく、他者への共感性にも欠けることが推測される。「人間」のイメージが希薄で、自己像や他者像がかなり歪んでいることも考えられる。人間関係にさまざまな障害が生じやすいであろう。

(5) 動物運動反応

動物運動反応も、健常者であれば 3～4 個、犯罪者・非行少年でも 3 個くらいは産出されると推定されるが、これも全く欠けている。(I 図で「ちょう」と「こうもり」が出ているが運動感覚を欠く。) 心的エネルギー水準の低下を示唆する。あるいは、内面のエネルギーがきわめて未分化な水準にとどまっており、自我との結びつきが弱い(自我化されていない)ために、動物運動の感覚さえ賦活されないのかもしれない。

(6) 色彩反応

FC = 3 で、反応数としては平均範囲内にある。ただし、形態水準は低い。色彩(情緒性)を否認することはないが、情緒的な刺激を受けるとうまく統制できないことが考えられる。

(7) 反応内容

人間反応としては、IX 図の「宇宙人(H)」と X 図の「ピエロ(の顔)(Hd)」がある。奇妙な自己像や他者像を抱えていることが考えられる。社会的な場面では協調できず、孤立しやすい人であろう。「ピエロ(の顔)。目、鼻、つけひげ」という「顔反応」は、対人的な過敏さを示唆するのかもしれない。「ピエロのつけひげ」は、見せかけへのこだわり、ありのままの自分を出せないこと、虚勢、自己顕示、自己像の二重性などを示唆するのかもしれない。

図版Iの「ソ連、あるいはユーラシア大陸 (Map)」, 図版IVの「夜の山脈。上から見下ろした感じ (Lds)」は、現実からの逃避傾向や人間世界からの孤立、あるいは知性化・遠隔化の防衛機制を示すとみられる。

「食物反応」の多いことが特徴的である。図版IIIの「なべ焼きうどんのなべ」, 図版VIの「アイスクャンデー」「りんご」「てんぷら」, 図版IXの「野菜のてんぷら」といった反応である。口唇欲求不満や口唇期固着を示唆し、未発達で幼児的な人格を思わせる。幼児期において愛情欲求が満たされなかったことが考えられる。「てんぷら」は、「衣をつける」ということからすれば、「本当の自分を隠す」「見せかけ」といった意味づけができるのかもしれない。

2 量的指標

(1) 知的側面

TR=13, W%=69%, SumF+% = 46%, W:M=9:0。これらの指標からみて、思考様式は具体的というよりも抽象的・観念的である。知性化の防衛機制を働かせやすい。知的には背伸びをしやすいが、(形態質の悪い反応が多いことから) 実際の能力は必ずしも伴っていないようだ。

CR=7であり、興味関心の範囲は特に狭いとはいえない。しかし、P=2であり、常識的・客観的な思考に欠ける。ユニークなものにとらえ方をする人であるというよりも、むしろ現実的・实际的な思考ができず、社会性や協調性に欠けた人であろうと思われる。

(2) 衝動性と統制力

M:FM=0:0, M:FM+m=0:0。運動感覚が全く欠けていることが特徴的である。現在、心的エネルギーの水準そのものが低下しているようである。本件後、少年鑑別所に収容され、内心では抑うつ状態が昂進しているのかもしれない。(犯罪者や非行少年が、事件後に施設内で抑うつ状態に陥ることはしばしばある。) ただし、少年鑑別所収容期間中、本人の意識はつねに清明であり、面接や行動観察からも特に抑うつ傾向は認めなかった。目に見える臨床像とテスト所見とはやや矛盾するようでもある。

(3) 外界への情緒的反応とその統制

FC:CF+C=3:0, (VIII+IX+X)% = 31%。これらの指標だけからは、情緒的刺激に対して、ある程度は統制力があるともいえる。しかし、(FK+F+Fc)% = 77%であり、神経症的な自我収縮を示す。情緒性・自発性が阻害されているようだ。

(4) 体験型

M:SumC=0:1.5。この指標からは色彩優位(外拡)型である。そのことからいえば、外界の情緒的刺激に直接的に反応してしまいやすい人である。しかし、M=0かつSumC=1.5であるから、極端に自我が収縮しているとみるべきであろう。外界からの情緒的刺激に対する反応性ないし応答力が弱まっており、現実的・能動的な対処ができないことが考えられる。

(5) 人格の統合水準

修正 BRS = - 26。自我機能は神経症水準以下で、精神病的な水準に近接している。SumF + % = 46% であり、現実吟味力もかなり弱い、あるいは低下している。

3 系列分析及び図版イメージ

(1) 系列分析

初発反応時間は、全般的にかなり遅く、しかも全ての図版において何らかのショックを示している。何をもちょうクとするかについて、ロールシャッハ研究者間の意見は一致していない。ここでは、表 1 に掲げた諸点に着目して「ショック」の系列分析を試みた。結果は、以下のとおりである。

図版 I (形態水準の低下)：P 反応は出ているが、運動感覚を欠く。形態水準の低い反応が混じっている。

図版 II (初発反応の遅延, P 反応の欠如)：赤色ショックで反応が遅れたとすれば、情緒的刺激への不安あるいは性に関する不安が考えられる。また、人間反応 (P) が欠けている。

図版 III (形態水準の低下, P 反応の欠如)：形態水準の低下は、性に関わる不安・葛藤を示唆するかもしれない。最も人間反応 (P) が出やすいこの図版で「人間」を見ていない。人間への無関心、あるいは性別同一性の混乱を示唆しているのか。ここでの「なべ焼きうどん (のなべ)」は、性に関する不安や性別同一性の混乱から部分的退行が生じ、幼児的な口唇反応が出たのかとも思われる。

表 1 本事例におけるショックの系列分析

図版	初発反応遅延 (正常範囲上限)	形態水準 不良	反応拒否 反応失敗	反応過少 (R = 1)	平凡反応の欠如
I	(24 sec)	○			(こうもり, 蝶・蛾を産出)
II	○ (36 sec)			○	○○ (人間, 四足獣の欠如)
III	(27 sec)	○		○	○ (人間の欠如)
IV	○ (28 sec)	○		○	○ (毛皮類の欠如)
V	(24 sec)		○		○○ (こうもり, 蝶・蛾の欠如)
VI	(33 sec)	○			○ (毛皮類の欠如)
VII	(32 sec)		○		○○ (人間, 四足獣の欠如)
VIII	○ (33 sec)	○		○	○○ (四足獣, 花の欠如)
IX	(41 sec)	○○			
X	○ (38 sec)			○	

- 注) 1. ○印はショックを示す。
 2. 「初発反応遅延」欄の○印は、初発反応時間が正常範囲を超えて遅延したことを示す。() 内の数字は、初発反応時間の正常範囲の上限(推定値)を示す。
 3. 「形態水準不良」欄の○印は、形態水準が「-+」又は「-」の反応数を示す。
 4. 「反応拒否・反応失敗」欄の○印は、反応を拒否又は反応に失敗したことを示す。
 5. 「反応過少」欄の○印は、反応数がひとつだけであることを示す。
 6. 「平凡反応」欄の○印は、平凡反応が産出されなかったことを示す。() 内は、その図版における平凡反応を示す。

図版 IV (初発反応の遅延, 形態水準の低下, P 反応の欠如): 初発反応の遅延は, 父親との関係に問題があることを示唆しているのか。毛皮反応 (P) の欠如は, 愛情欲求や依存欲求の抑圧・否認を示唆しているのかもしれない。

図版 V (反応失敗, P 反応の欠如): 黒色ショックであろうか。そうであるとすれば, 抑うつ気分や不安が高まり, それに圧倒されて反応できなかったのもであろうか。

図版 VI (形態水準の低下, P 反応の欠如): 性ショックであろうか。そうであるとすれば, 男性性・女性性あるいは性別同一性をめぐる問題があるのかもしれない。それとも, 陰影 (材質) ショックであろうか。そうであるとすれば, 愛情 (依存, 身体接触) 欲求に関連する問題が考えられる。

図版 VII (反応失敗, P 反応の欠如): ここでも, 人間反応 (P) を産出できなかった。母親との関係に問題があることを示唆しているのかもしれない。

図版 VIII (初発反応の遅延, 形態水準の低下, P 反応の欠如): 反応が遅れ, 動物や花といった P 反応を産出できなかった。色彩ショックと思われる。情緒的な強い刺激に混乱したことが考えられる。

図版 IX (形態水準の低下): 形態水準の低下がいちじるしい。情緒的な刺激に過敏で, 適切に対処できないことを示唆する。

図版 X (初発反応の遅延): 反応が遅れ, しかもたったひとつしか反応を産出できなかった。情緒的刺戟に混乱したことがうかがわれる。

(2) 図版イメージ

好き・嫌いカード, 父親像・母親像・自己像カードを選択させた。

図版 IV を「嫌いカード」として選択し, その理由は「えたいが知れない。何が何だか分からないから」と言う。また, この図版を「父親イメージ」として選択し, その理由は「何となく」とであると言う。この図版では, 初発反応が遅延するとともに, 産出された反応は「夜の山脈。山脈を上から見下ろした感じ」という形態質の悪い di 反応であった。暗さへの言及があり, また距離化・遠隔化の防衛機制も働いている。こうしたことを考え合わせれば, 本人にとって, 父親のイメージは「えたいの知れない」ものなのだろうか。父親への嫌悪・反感があり, 父親からは距離をとろうとしているのかもしれない。

図版 X を「母親イメージ」として選択し, その理由は「分からない」と言う。この図版では, 初発反応が遅れ, しかもたったひとつしか反応を産出できなかった。この図版は, さまざまな色と形が描かれ, 情緒的な混乱を生じやすい。そのことが「母親イメージ」とつながっているようだ。ここでの反応は「ピエロ (の顔)」というものであり, 「目, つけひげ, 鼻」が言及された。本人にとって, ほんとうの姿が見えにくい母親であり, また女性性に欠けた母親であるのかもしれない。

図版 V を「自己イメージ」として選択し, その理由は「バランスが悪いから」と言う。この

図版では反応に失敗しており、「こうもり」や「蝶・蛾」という平凡反応さえ産出することができなかった。黒色ショックであろうと思われる。抑うつ気分や不安が高まるとともに、「バランスがとれていない（足が細すぎて頼りない）」といった否定的な自己イメージが賦活されたようだ。

図版 IX を「好きカード」として選択し、その理由は「自然な色がある。てんぷらとかがあるから」と言う。この図版では「野菜のてんぷら」と「宇宙人」が出現しており、いずれも形態質はやや不良である。「宇宙人」は、人間世界から遊離し、異空間に生きる自己像であるのかもしれない。また、口唇欲求が強いことが示唆される。

4 平均人や境界例との比較

表 2 は、平均人の反応、境界例 (N=20) の反応の平均、及び本事例の反応をひとつにまとめたものである。この表を踏まえつつ、本事例のロールシャッハの特徴を吟味すると、以下のと

表 2 各種指標についての平均人・境界例・本事例の比較表

指 標	平均人の推定値 (推定正常範囲)	境界例 (N=20) の平均値	本 事 例
TR	28.8 (17 ~ 41)	27.5	13
W%	46.7% (28 ~ 65%)	51.3%	69.2%
W : D	13.4 : 13.0	14.1 : 9.5	9 : 1
(Dd+S) %	8.3% (0 ~ 19%)	12.4%	23.1%
F%	44.2% (30 ~ 58%)	36.8%	61.5%
SumF%	88.4% (81 ~ 96%)	90.0%	100.0%
F+%	80.7% (66 ~ 96%)	66.7%	50.0%
SumF+%	83.1% (73 ~ 94%)	78.0%	46.2%
M	4.0	5.1	0
FM	3.8	4.3	0
Σm	0.6 (0 ~ 1)	1.5	0
FC	2.2	1.5	3.0
CF	1.6	(—)	0
C	0.1	(—)	0
C'	0.7	(—)	0.5
Fc	1.8	(—)	1.0
C	0.3	(—)	0
FK	0.9	(—)	0
M : SumC	4.0 : 2.7	5.1 : 3.5	0.0 : 1.5
FC : CF + C	2.2 : 1.7	1.5 : 2.6	3.0 : 0
A + Ad (%)	13.5 (46.9%)	10.80 (39.3%)	2.0 (15.4%)
H + Hd (%)	7.5 (26.0%)	5.3 (19.3%)	2.0 (15.4%)
CR	9.6	7.2	7
P	5.8	4.8	2

注) 1. 平均人の推定値は、村上・村上 (1991) の資料による。
2. 境界例 (N=20) の平均値は、馬場 (1997) の資料による。

おりである。

領域的には、W 反応が多い。知性化の防衛を働かせやすいことを示唆していると思われる。形態反応が多いが、形態水準は平均人よりもいちじるしく低く、境界例よりもさらに低い。おそらく自我機能の水準は、いわゆる境界例よりもさらに低く、現実吟味力はきわめて脆弱である。

反応数がいちじるしく少なく、しかも運動感覚 (M, FM, m) が全く欠けている。境界例にあっては反応数が多くかつ M も多いが、本事例はそれと対照的である。対人場面での能動性や人間に対する共感性が (境界例と比べても) 全く欠けているようだ。本事例は、分裂病水準にまで自我が退縮しているのであろうか。それとも、本件行為によって心的エネルギーが放散され、抑うつ状態に陥っているのかもしれない。

ものの見方は、常識的・客観的なとらえ方ができない。境界例に比べても、P 反応がかなり少ない。認知パターンは形態優位であり、もっぱら外界の「かたち」だけにたよりやすい。ニュアンスを共感的にとらえるような感性には欠けている。(Dd+S)%は、境界例よりも高くなっており、かつ di 反応を含む。時には特異な妄想様ともいえる外界把握をすることが示唆される。状況を客観的にきちんととらえたり、相手のことを共感的に理解するような想像力・内省力を欠く。

第4節 TAT 所見

マッレー版 TAT を 15 枚施行した。使用図版は、1, 2, 3 BM, 6 BM, 7 BM, 8 BM, 10, 11, 12 F, 13 B, 13 MF, 15, 18 GF, 19, 20 である。ここでは、図版ごとの解釈には触れず、全体を通して特徴的と思われる点をまとめる。

1 認知様式

11 図において、橋の上の小さな人物をすぐさま認め、そこから物語を展開している。13 B 図において、少年がハーモニカを吹いていると見ている。この 2 点が細部への敏感な認知である。「ハーモニカ」の着想は、細部固執的というよりも、かなり主観的かつ特異な認知といえよう。主要な事物の見落としとしては、3 BM 図のピストルの見落としがある。そのほかには、顕著な見落としはない。全反応を通して、奇異・奇矯な認知の歪曲はない。

以上のことから、外界把握の様式としては、やや過敏で、細部にこだわることもある。時には主観的な思い込みから、かなり特異な認知をすることもあるようだ。しかし、極端に歪んだ認知やいちじるしく粗雑な認知をすることはないようである。

2 図、12 F 図及び 13 MF 図で、人物の姿勢や視線に着目し、意味づけている。対人場面では、やや強迫的な過敏さがあるかもしれない。ちなみに、安立 (1999) は、2 図における前景の女性と後景の人物との間の「葛藤」を物語ることや、人物の姿勢や視線のちぐはぐさに言及することは「青年期の境界例心性」の特徴であると指摘している。本事例の 2 図でも、そうした「境界例

心性」が現れているのであろう。

8 BM 図で「何か気持ちが悪い」と述べ、19 図では「頭が痛くなってきた」と言う。いずれも反応がむつかしい図版である。対処困難な状況に直面すると、情緒的に混乱したり、動揺しやすい人であろうと思われる。

2 家庭状況及び両親像

家庭状況を推察する上で手がかりになりそうな反応は、以下のものである。

- (1) 有名な音楽家の家。親は子に強制的に音楽を教え込む（1 図）
- (2) 貧しい農村の家。娘は家から独立したい（2 図）
- (3) 父親不在の家。夫婦は離婚状態で「何十年の空白」のある家（6 BM 図）
- (4) 登場する男性は遠い親戚の男（6 BM 図）
- (5) 浮浪児がひとり残された家。浮浪児は家を出て、犯罪組織へ行く（13 B 図）
- (6) 母から折檻を受ける娘。その娘は家を出て駆け落ちする（18 GF 図）
- (7) 海は荒れ、嵐と雪の世界にあるテント（19 図）
- (8) 戦争で家は全焼。家人や親戚とも音信不通で、生死も分からない（20 図）

こうした空想を並べてみると、本人は家からの自立を志しているようでもあるが、家は本人にとって安らぎの場として機能していないようでもある。家族としてのまとまりのない家庭が推測される。

父親像につながると思われる空想は、以下のものである。

- (1) 有名な音楽家。子どもにバイオリンを教えるが、子どもへの期待が過剰（1 図）
- (2) 古い考え方の親。子ども（＝娘）に背を向け、子どもの気持ちを理解していない（2 図）
- (3) 家を出て、女遊びばかりして死んだご主人（6 BM 図）
- (4) 不正融資が発覚しそうになると、その責任を部下に押しつける上司（7 BM 図）
- (5) 酒飲みで、幼児虐待する父親（13 B 図）
- (6) 愛人とのスキャンダルが発覚し、政治生命を絶たれる政治家（13 MF 図）

ここで、7 BM 図における上司の不正融資を「お金の不正融資」ではなく「愛情の不正融資」と考えれば、「女遊びばかりしていたご主人」（6 BM 図）や「政治家と愛人のスキャンダル」（13 MF 図）といった反応とも関係してくるようである。

次に、母親像につながると思われる空想は、以下のものである。

- (1) 子どもに過剰な期待をかける親（1 図）
- (2) 古い考えから子ども（＝娘）の自立に反対するが、子どもの気持ちには無関心な親（2 図）
- (3) ご主人と離婚状態が続いていた老女（6 BM 図）

(4) 浮浪児の母親は死んでしまった (13 B 図)

(5) 子ども (=娘) の髪をつかんで折檻する母 (18 GF 図)

以上の反応からすると、父親像も母親像もきわめて悪い。父親像や母親像につながると思われる人物の死の空想 (6 BM 図, 13 B 図) は、父母への攻撃性の屈折した表出でもあろうし、「見捨てられ不安」とも関係するのであろう。いずれにせよ、父母イメージの悪いことから、幼児期からの母子関係や父子関係が不安定であったことが推測される。

3 自己像

自己像に結びつくと思われる登場人物を列挙すると、次のとおりである。

- (1) 親の期待に逆らうこともできない子ども (1 図)
- (2) 自分の生き方や気持ちを分かってくれない親に不満を持つ子 (=娘) (2 図)
- (3) ウーマンリブのような社会的自立をめざし、どんどん勉強する子 (=娘) (2 図)
- (4) 電車を乗り越し、あわてて家に帰る酔っ払い (3 BM 図)
- (5) 上司の不正融資の罪を背負い、警察に捕まる部下 (7 BM 図)
- (6) 夢の中で、ばらばらに切り刻まれる自分。自分か他人か分からない (8 BM 図)
- (7) 原住民の地下宮殿から宝物を奪い、英雄になる人 (11 図)
- (8) 周囲からも珍しげにながめられる白人のレポーター (12 F 図)
- (9) 虐待される家から離れ、浮浪児はついにマフィアのボスになる (13 B 図)
- (10) 醜い亡霊 (の頭部) と女性の美しい脚線美 (下半身) の合体 (15 図)
- (11) 母親に折檻され混乱する娘。家出をして駆け落ちする (18 GF 図)
- (12) 嵐と雪の世界。その中のテントで寒さに耐える人 (19 図)
- (13) 戦争で自分の家が焼けた。家族の生死さえ分からず、飢え死にする復員兵 (20 図)

これら自己像を投影していると思われる登場人物をみると、親 (家) への依存とそこからの自立をめぐる葛藤や不安が反映されている。そうした自己像は年齢相応ともいえる。しかし、卑小化された (価値下げられた) 自己像と誇大な (原始的に理想化された) 自己像が並存していること、自我分裂的で奇矯な自己像を抱えていること、男性同一視や自我同一性がゆらぎやすいことなど、病的ともいえる特徴が看取される。

4 性愛と受罰

男女の密かな性愛やいわゆる不倫関係が暴露され、罰を受けるという空想が繰り返されている。それらを列挙すると、以下のとおりである。

- (1) 妻 (=老女) を捨て女遊びばかりしていたご主人は死んでしまう (6 BM 図)
- (2) 政治家は愛人との密会現場を報道され、スキャンダルから政治生命を失う (13 MF 図)
- (3) 娘が恋人と密会していたところを見つけられ、母から折檻を受ける (18 GF 図)

こうした空想物語から、本人にとっては性愛が大きな心のテーマになっていることがうかがわれ、それには強い罪悪感あるいは受罰願望が伴っていることが示唆される。10 図における男女の抱擁場面を見て、

(4) 教会における神父と女性信者の朝のあいさつ (10 図)

と語っているのは、おそらく性をめぐるエロティックな連想を否認し、反動形成したことから生じた空想であろうと思われる。本人にとって、性の問題を意識的・自覚的に受けとめることはむづかしいことを示唆している。そのように考えれば、

(5) 地下宮殿から宝物を奪い、国に帰って英雄になる (11 図)

(6) 娘は恋人と駆け落ちする (18 GF 図)

という物語は、性愛の成就を願望する空想であるのかもしれない。さらに、15 図における、

(7) 芸術家の絵。女性の曲線の美や脚線美を描いた (15 図)

という反応は、女性の身体へのエロティックな関心を「芸術家の絵」に託して表出したものであろうと思われる。

5 口唇的欲求

食べ物や飲み物をめぐる空想が繰り返されている。それらを列挙すると、

(1) 酒に酔っ払って、電車内でぐうぐう寝ている (3 BM 図)

(2) ただ食べることを考え、お恵みを乞う浮浪児。口にはハーモニカ (13 B 図)

(3) 復員兵は飢え死にってしまう (20 図)

といった空想である。いずれも、幼児的な口愛欲求を強く抱いていることを示唆する。おそらく幼児期における愛情欲求が満たされないまま思春期に至り、幼児的な愛情欲求不満とともに性的欲求が高まっているのであろう。

6 原始的攻撃性

以下の空想は、自我による統制がむづかしい未分化かつ原始的な攻撃性に結びついていると思われるものである。

(1) 人体解剖空想 (他人あるいは自分が切り刻まれている) (8 BM 図)

(2) 宮殿崩壊、洞窟崩壊 (11 図)

(3) 嵐、海はしけている (19 図)

(4) 戦争で家が焼けた。復員兵は餓死する (20 図)

こうした人体への侵襲、大きな破壊力、自然の猛威、戦争による破壊といった空想は、自我化されない、つまり自我によって統制できない原始的な攻撃性を示唆するものと思われる (齊藤, 1995 a)。また、8 BM 図における「人体ばらばら空想」は、他者に対する暖かい共感性や人間的な情性に欠けた冷情的な攻撃衝動を示唆する (齊藤, 1995b)。

7 高次の防衛機制と原始的防衛機制

やや高次の防衛機制としては、知性化・遠隔化といった機制がひんばんに用いられている。例えば、以下の反応にそうした機制がうかがわれる。

- (1) 娘は学校へ行ってどんどん勉強する (2 図)
- (2) 「税務調査」や「不正融資」といったことばづかい (7 BM 図)
- (3) 設定は、エジプトか南アメリカ (11 図)
- (4) メンデルスゾーンのフィンガルの洞窟 (11 図)
- (5) イランは (イスラムの) シーア派 (12 F 図)
- (6) 時代設定は、アメリカの 1930 年代 (13 MF 図)
- (7) これは芸術家の絵である (15 図)
- (8) 部分的には見えるが、全体図が出てこない (19 図)

抑圧・否認と反動形成の例としては、

- (1) 朝の教会で神父と女信者があいさつ (10 図)

がある。一方、原始的な防衛機制も顕著にみられる。それらがうかがわれる反応は、

- (1) 自分がばらばらにされる夢 (8 BM 図) (自我分裂)
- (2) 自分が別の姿の他人になったか、他人が自分に乗り移ったか (8 BM 図) (自他の融合)
- (3) 橋の上の小人物が宮殿から宝物を奪い英雄になる (11 図) (万能感幻想と原始的理想化)
- (4) お恵みを乞う浮浪児は、ついにマフィアのボスになる (13 B 図) (価値下げと原始的理想化)

といった反応である。こうした原始的防衛機制は、ロールシャッハ・テストでは出現しなかったものである。これらの反応は、本事例の人格水準が神経症以下で、精神病水準に近接していることを示唆する。おそらく、ふつうの場面では知性化・遠隔化あるいは抑圧・否認といった機制に頼っているが、危機的な状況に直面すると、原始的な防衛に頼ろうとする人であろう。

第5節 まとめ (総合的考察)

最後に、ロールシャッハ・テストと TAT の結果を照合しつつ、この事例の問題点や本件非行の心理機制について、心理検査データから推測されることをまとめる。

1 人格水準

ロールシャッハ・テストの修正 BRS = -26 であり、人格水準としては、神経症以下、精神病に近接するレベルである。馬場 (1997, p. 245) は、境界例 20 例のロールシャッハを吟味した結果、かれらの特徴として「反応の豊富さ」(平均 R = 27.4)、「人間運動感覚の過剰」(平均 M =

5.1)、「運動感覚優位」(M: SumC= 5.1: 3.5)を指摘し、境界例の内面は観念過剰であり、貧困又は収縮した事例はわずかに1例であったという。そうしたデータと比較すれば、本事例はいちじるしく貧困かつ退縮した反応特徴を示し (R= 13, M=0, M: SumC= 0.0: 1.5), ロールシャッハ所見からは、精神病圏に近接する人格であろうと考えられる。

他方、TATにおける反応産出量は多い。ロールシャッハ図版に比べれば構造化されているTAT図版に対しては、空想・観念活動は活発に働いている。ただし、その空想内容を見ると、低次の原始的防衛機制(自我の分裂・融合、原始的理想化、価値下げ、万能感空想)が出現しており、いわゆるプレ・エディパル段階の(少なくともプレ・エディパル的な側面を多分に残している)人格であることが強く示唆される。

本事例はさまざまな資料・情報を総合し、「境界性人格障害の疑い」と判定された。しかし、心理検査の所見だけからは、いわゆる「境界例」の人格水準よりもさらに病的かつ退縮的な人格であるといつてよいだろう。類型的に言えば、「分裂病型人格障害」に近似する面もかなりあるといえそうである。そうした退縮した人格を知性化や否認による防衛で覆い隠し、日常生活を送ってきた人であろうと推測される。

ちなみに、本事例は、少年鑑別所に収容される前に、検察庁の精神科医師によって「精神分裂病」と診断されている。この診断こそが本事例の本質(?)を看破したものであるのかもしれない。しかし、少年鑑別所における調査では、積極的に精神分裂病と査定することはできなかった。

2 原始的攻撃性

本事例は被害者に傷害を負わせたものの殺害には至らなかった。山口・浜・西田(1991)のいう「殺人を遂行する力に欠けた弱小型」に相当する事例であるとも考えられる。ちなみに、バウム・テストからみれば、心的エネルギーはきわめて貧弱である。風景構成法でも、動物を描き込むことができなかった。

ロールシャッハ・テストで、動物運動反応(FM)は人格のより原始的・本能的な層とつながったものであって、「幼児的かつ即行的な衝動性」(高橋・北村, 1993, pp. 130-131)や「洞察や理解を伴わない衝動傾向」(片口, 1981, p. 174)を反映するといわれる。また、無生物運動反応(m)は、「未熟な欲求の行動化、衝動性、欲求不満、内的緊張」(津田, 1963)を意味するとされる。しかし、本事例では、FMもmも全く欠けていた。本件そのものが激越な行動化であるから、本件後に施行されたロールシャッハ・テストでは、(FMやmとして表出されるような)本能的・原始的な攻撃性が消退していると考えらるべきであろうか。

一方、TATでは、「人体解剖空想」(8 BM 図)、「宮殿崩壊、洞窟崩壊」(11 図)、「嵐で、海はしけている」(19 図)、「戦争で家が焼けた。復員兵は餓死」(20 図)といった原始的衝動性や破壊性を示す空想がかなり出現している。これらの空想は、攻撃性というよりも、内心の不安を反映したものであるかもしれない。しかし、そうであるとしても、これらの空想は脆弱な自我が

大きな不安によって圧倒されていることを示唆している。したがって、その背後には未分化かつ原始的ともいえるエネルギーがあり、そうしたエネルギーは脆弱な自我によっては統制できず、短絡的・衝動的な行動を惹起しやすいと考えてよいだろう。

そうしたことを考え合わせると、あいまいなロールシャッハ図版に対しては強い知性化の機制が働いたため、もっぱらW優位、F優位（ただし、形態質はあまりよくない）の反応で終始し、未分化な衝動性が出現しなかったとも思われる。TAT図版はある程度構造化されており、そのためにかえて本事例の未分化な攻撃性や破壊性をうまく映し出すことができたのであろうか。

3 対人関係能力の欠如・共感性の欠如

ロールシャッハ・テストにおいてM=0であり、形態質の良い人間反応が全く欠けていた。風景構成法では、スティック・フィギュア（棒状人間）を描いた。TATにおいては、「人体ばらばら空想」（8BM図）が出現した。いずれも、対人的な共感性、対人関係能力に著しい問題があることを示唆する。

TATにおけるかなり豊かな空想内容からすれば、ロールシャッハ・テストでM=0というのは驚きである。Mは「パーソナリティの原動力」ともいわれる。幼少期に強い愛情欲求不満を募らせ、きわめて不安定な養育環境にあった者は、Mが少なくなるとされる。また、Mの少ないことは、父親関係（三者関係、エディプス期）よりも、母親関係（二者関係、口唇期）の問題を反映するという（高橋・北村，1993，pp.129-130）。おそらく、本事例も、母親関係に相当な問題があったと推測され、そのことがその後の人格発達を大きく歪めたのではないと思われる。しかし、そうした早幼児期における養育状況や人格形成の過程を本人や保護者との面接調査から明らかにすることは容易でない。

本事例は個別的な指導を受けていた教諭を刺殺しようとしたものであるが、ロールシャッハ・テストでM=0の少年を相手にカウンセリング的な指導を行うことはきわめて困難であったろうと思われる。教育現場において、いわゆるカウンセリング・マインドを持つ教師が個別的な指導を行うことは望ましいといえよう。しかし、これほど人格偏倚が大きいケースに対して「枠組み」の弱い場面でカウンセリング的な指導を行うことはやはり無理であったろうと考えられる。ところで、心理療法を行うことで（色彩反応は増えても）人間運動反応はなかなか増えないとされている。しかし、高橋・北村（1993，p.130）は、少年院で矯正教育を受けた非行少年11名に対し、ロールシャッハ・テストを再検したところ、色彩反応が増加した者6名、人間運動反応が増加した者6名であったと報告している。思春期の可塑性に富む人格であれば、適切な処遇によってかなりの変化を期待できるとも考えられる。（ただし、本事例では、少年院でロールシャッハ・テストを再検することはできなかった。）

4 性愛的幻想

ロールシャッハ・テストにおいて、II 図でショック（反応遅延。赤色ショックか?）が生じ、S 領域に着目して「こま（玩具）」と反応した。性カードとされる VI 図では3つも食物反応が出ており、そのうちのひとつが解剖様反応（りんごの断面）であった。柔らかい質感があり女性イメージを生じやすい VII 図で反応に失敗した。VIII 図において解剖反応が出現した。これらのことから、おそらく女性の身体への関心や性愛的な接触欲求がいちじるしく高いが、それが強く抑圧・否認されていることが推測される。

TAT においても、15 図において、芸術家の絵であるとした上で、人物の下半身に着目し「女性の脚線の美」を空想した。これも女性の身体への関心を示唆する。また、異性関係をテーマとする空想（「娘は恋人と駆け落ち」（18 GF 図））とともに、密かな性愛関係が暴露されたり、道にはずれた性愛関係が処罰される空想が繰り返し語られた（「女遊びをしていた主人は死ぬ」（6 BM 図）、「愛人との密会が報道陣にあばかれ、政治家はスキャンダルで政治生命を失う」（13 MF 図）、「愛人との密会が発覚し、娘は「恥さらし」とばかりに母から折檻される」（18 GF 図））。さらに、性愛的欲求の反動形成と思われる空想（「教会で神父と女性信者があいさつ」（10 図））が出ている。

これらの反応から、A 少年が本件被害者の女性教諭に接近したことの背後には、強い性愛的願望があったものと推測される。女性教諭が少年を個別に指導したことがきっかけとなり、本人の心情がいちじるしく改善されたのは、転移性治癒（恋愛性治癒とでもいうべきか?）であったろうと推測される。A 少年の目に、女性教諭は「理想の女性（的な存在）」として映り、その教諭との「親密かつ個人的な関係」は、少年にとっては「恋愛関係」でもあったのであろう。と同時に、そうした関係の中でいちじるしい退行が生じ、幼児的な口愛的欲求も昂進したであろう。このころ、A 少年と教諭は喫茶店で面談したり、いっしょに映画を観に行ったという。

しかし、A 少年の人格の偏りに気づいた教諭が、少年に精神科受診を勧め、少年を精神科にリファーしようとしたことから、ふたりの関係はこじれていく。ふたりの「親密な関係」は保護者や学校関係者に知れわたり、教諭は個別的指導を拒否した。幻想的に理想化されていたイメージが一举に価値下げられるとともに、強い「見捨てられ不安」が A 少年を襲ったと考えられる。その当時の A 少年の自我状態は、いわば「よい乳房」を見失った幼児のような段階にまで退行していたといえるかもしれない。と同時に、おそらく性愛的な幻想に伴う罪悪感も募ったであろう。

そうした不安や罪悪感から、いちじるしく混乱した A 少年は自傷行為や自己破壊的な行為（リスト・カット、駅のホームからの飛び降り）を繰り返した。これらの行為は、一種の自罰行為でもあり、また教諭から見捨てられまいとする必死のあがきでもあったのだらう。

5 幼兒的な口唇欲求

ロールシャッハ・テストにおける食物反応（「なべ焼きうどん」(III 図)、「アイスクャンデー、りんご、てんぷら」(IV 図)、「野菜てんぷら」(IX 図)）、TAT における飲み物・食べ物空想（「酒を飲みすぎた酔っ払い」(3 BM 図)、「浮浪児はハーモニカを吹き、食べ物のお恵みを乞う」(13 B 図)、「復員兵は餓死」(20 図)）からみて、本事例がいちじるしく強い口唇欲求を持っていることは、ほぼまちがいない。こうした飲食に関する空想は、きわめて幼兒的な心性の反映でもある。これらの反応からも、幼兒期において口唇欲求・愛情欲求をじゅうぶんに満たされないまま生育したことが推察される。

そうした少年は、女性教諭との「親密な関係」において、いちじるしく退行し、おそらく幼兒的ともいえるほど教諭に甘え、まわりついたのであろう。そうした水準まで退行した少年を教諭が受け入れられるはずもない。結局、指導関係を中断し、精神科医師にリファーセざるをえない状況に立ち至ったものと思われる。強い口愛的な依存欲求を満たされなくなったことから、見捨てられ不安が昂じ、そこから短絡的な攻撃行動が引き起こされたと考えられる。

第6節 むすび

ロールシャッハ・テストや TAT の所見を踏まえて、A 少年の人格や心理力動を考察した。もちろん心理検査の解釈はあくまで仮説的・暫定的なものである。したがって、実際の鑑別結果通知書に、上に述べたような考察の内容をそのまま記載することはないし、また心理検査のデータだけから判定意見をまとめることもない。しかし、心理検査を踏まえることで、事件の背後にある心理力動についての理解が深まったと思われる。

A 少年について鑑別結果は「精神分裂病を否定することはできないが、人格障害の色彩がきわめて強い」とした上で、「本人に罪障感がないこと、保護者の保護能力の乏しいこと等を勘案し、医療少年院における専門的かつ治療的な処遇が相当」と判定した。

審判における決定も医療少年院送致であった。しかし、A 少年は、最後まで「事件の原因は、カウンセラーとしての責任をとってくれなかった先生にある」と主張し続けた。少年は、審判の決定を不服とし、みずから高等裁判所へ抗告した。しかし結局、その抗告も棄却され、医療少年院への送致が確定した。

齊藤：教師をナイフで刺した非行少年の人格査定

資料1 ロールシャッハ・テスト

図版	反応のプロット	Loc.	Det.	FLR	Cont.	P-O
I 12" 1'32"	① 蝶 (形が似ている)	W	F	+ -	A	P
	② ソ連 (ユーラシア大陸。形から)	W	F	- +	Map	
	③ こうもり (全体の形から)	W	F	+ -	A	P
II 49" 1'24"	①√ こま (白い部分。形から)	S	F	+ -	Obj	
III 7' 1'52"	① なべ (こころへんの形。なべやきうどんのなべ)	dr	F	- +	Obj	
IV 1'07" 1'22"	① 夜の山脈 (濃い薄いところ。上から見下ろした感じ。色が黒いから)	di	FK, C'	- +	Lds	
V 1'00"	Failure					
VI 11" 1'19"	① アイスキャンデー (ここを除く形)	Wc	F	+ -	Food	
	② リンゴの断面 (ここを除く。バサッと切った断面。色の濃さのちがひ。種のあるところ)	Wc	Fc	+ -	Food	
	③ てんぷら (同じところ。衣がついている。ふちの形から)	Wc	F	- +	Food	
VII 1'17"	Failure					
VIII 37" 1'10"	①√ 内臓 (全体の形。肺、膀胱、筋肉の色も)	W	FC	- +	At	
IX 13" 1'27"	① 野菜てんぷら (全体。かぼちゃ、ピーマン、しょうがとか。色と形)	W	FC	- +	Food	
	②√ 宇宙人 (全体の形。足、頭、胴体)	W	F	- +	(H)	
X 1'16" 1'33"	① ピエロ (目、つけひげ、鼻。色々な色から)	D	FC	+ -	Hd	
Total Response=13 TT = 13' 56" P = 2 T/R ave.=1' 04" P% = 15.4% IntRT. ave.= 34" Failure=Nos. V, VII IntRT. ave. (Achrom)=31" IntRT. ave. (chrom)=36" W:D = 9 : 1 W% = 69.2% (D+d)% = 7.7% Dd% = 15.4% S% = 7.7% W:M = 9.0 : 0.0 M : SumC = 0.0 : 1.5 (FM+m):(Fc+c+C') = 0.0 : 1.5 (VIII+IX+X)% = 30.8% F% = 61.5% SumF% = 100.0% F+% = 50.0% SumF+% = 46.2% M : FM = 0.0 : 0.0 M:(FM+m) = 0.0 : 0.0 FC:(CF+C) = 3.0 : 0.0 H% = 15.4% A% = 15.4% At% = 7.7% CR = 7 (H+A):(Hd+Ad) = 3.0 : 1.0 (H+Hd):(A+Ad) = 2.0 : 2.0 Mod. BRS = - 26						
Most Liked Card : IX (不自然でない。色がある。てんぷらとかもある) Most Disliked Card : IV (えたいが知れない。何が何か分からない。何も見えないから) Father Image Card : IV (何となく) Mother Image Card : X (これも理由は分からない。何となく) Self Image Card : V (バランスが悪いからかな)						

齊藤：教師をナイフで刺した非行少年の人格査定

資料1 ロールジャッパ・テスト

図版	反応のプロット	Loc.	Det.	FLR	Cont.	P-O
I 12" 1'32"	① 蝶 (形が似ている)	W	F	+ -	A	P
	② ソ連 (ユーラシア大陸。形から)	W	F	- +	Map	
	③ こうもり (全体の形から)	W	F	+ -	A	P
II 49" 1'24"	①√ こま (白い部分。形から)	S	F	+ -	Obj	
III 7' 1'52"	① なべ (ここらへんの形。なべやきうどんのなべ)	dr	F	- +	Obj	
IV 1'07" 1'22"	① 夜の山脈 (濃い薄いところ。上から見下ろした感じ。色が黒いから)	di	FK, C'	- +	Lds	
V 1'00"	Failure					
VI 11" 1'19"	① アイスキャンデー (ここを除く形)	Wc	F	+ -	Food	
	② リンゴの断面 (ここを除く。バサッと切った断面。色の濃さのちがひ。種のあるところ)	Wc	Fc	+ -	Food	
	③ てんぷら (同じところ。衣がついている。ふちの形から)	Wc	F	- +	Food	
VII 1'17"	Failure					
VIII 37" 1'10"	①√ 内臓 (全体の形。肺, 膀胱, 筋肉の色も)	W	FC	- +	At	
IX 13" 1'27"	① 野菜てんぷら (全体。かぼちゃ, ピーマン, しょうがとか。色と形)	W	FC	- +	Food	
	②√ 宇宙人 (全体の形。足, 頭, 胴体)	W	F	- +	(H)	
X 1'16" 1'33"	① ピエロ (目, つげひげ, 鼻。色々な色から)	D	FC	+ -	Hd	
Total Response=13 TT = 13' 56" P = 2 T/R ave.=1' 04" P% = 15.4% IntRT. ave.= 34" Failure=Nos. V, VII IntRT. ave. (Achrom)=31" IntRT. ave. (chrom)=36" W:D = 9:1 W% = 69.2% (D+d)% = 7.7% Dd% = 15.4% S% = 7.7% W:M = 9.0:0.0 M: SumC = 0.0:1.5 (FM+m):(Fc+c+C') = 0.0:1.5 (VIII+IX+X)% = 30.8% F% = 61.5% SumF% = 100.0% F+% = 50.0% SumF+% = 46.2% M: FM = 0.0:0.0 M:(FM+m) = 0.0:0.0 FC:(CF+C) = 3.0:0.0 H% = 15.4% A% = 15.4% At% = 7.7% CR = 7 (H+A):(Hd+Ad) = 3.0:1.0 (H+Hd):(A+Ad) = 2.0:2.0 Mod. BRS = - 26						
Most Liked Card : IX (不自然でない。色がある。てんぷらとかもある) Most Disliked Card : IV (えたいが知れない。何が何か分からない。何も見えないから) Father Image Card : IV (何となく) Mother Image Card : X (これも理由は分からない。何となく) Self Image Card : V (バランスが悪いからかな)						

資料2 TAT

図版	反 応 の プ ロ ッ ト
1	……親が有名な音楽家で、子どもにバイオリンを熱心に教える。親が期待をかけすぎていて、本人は悩んでいる、どうしても親の期待に答えられない。……結局、親の敷いた道をたどるといふか……そうせざるを得なくなる。……一流でもないけど、親の七光りを受けて、そこそこの音楽家になるけど、親を追い越すことはできない。…今、親に対しては、なんで自分だけがこういうことやらなければいけないかという思いを持っている。でも、お父さん、お母さんは、子どもに期待している。
2	………(長い沈黙)………貧しい農村で、この娘がこの両親の娘。娘は、自分は、ウーマンリブみたいな生き方をしたい、親から独立したい。だけど、親は、考え方が古くて、あまりそういう方向に進めたくない。娘が本を持ってますね。娘は学校へ行って、どんどん勉強して、社会への道を行こうとする。両親はそれに反対しているんで、肩身狭そうに学校へ出掛けようとしている。…何か両親に不満を持っているんでしょうかね、娘は。…親が自分の生き方を理解してくれないから。それで、肩身狭い思いをしている。親は娘に無関心でしょ、背を向けているし…。そういうところが、娘の気持ちを理解していない。……普通の親子とも見えない。娘に背を向けているし。……娘は不満を持ってるとでしょうね。
3 BM	………(長い沈黙)………電車の中で、座席にもたれている。……(笑い) これ、ぐうぐう寝てるんですね、酔っぱらって。…その前後は分からない。あとは、駅を乗り越して、終点まで行った時に車掌さんに起こされる。……起こされて、深夜タクシーで家に帰って、そのまま、また寝る。…朝、起きたら二日酔いしてた(笑い)。
6 BM	………(熱心に見つめる。長い沈黙)………この老女のだんなさんが亡くなったことを、この男性が、この男性は遠い親戚なんですけど、この男性が伝えに来た。この老女のだんなさんというのは、ずっと別居してて、ほとんど離婚状態だったんです。なぜそうなったかという、結局、御主人は奥さんに全然目を向けなくて、女遊びばかりしていた。それで、実質的に夫婦でなくなって。…御主人は財産もあり、最後に死んだ時に、財産を遺言でこの老女に贈ると書いてあって、「済まなかった」と書いてあった。それを伝えに来たのが、この男性。それをこの老女が聞いている。この老女は複雑な気持ちで、要するに死んだ人を悪く言えないし、最後にはだんなさんは謝った。だけど、何十年の空白はもどらない、埋められないという気持ち。……この男の人は、言いに来ただけで、…そうです、遠い親戚だから、余り私的な感情は持たない。…その先は、分からん。
7 BM	………(熱心に見つめる。長い沈黙)………奥の方の人が手前の人の会社の上司です。会社というのは、銀行で、その上司の命令で部下が不正融資したんです。…税務調査が何かで会社の経営状態を調べた時にそれが発覚しそうになって、それで、その部下の人は支店長で、…支店長クラスでやっていたということにしてほしいと上司に言われてる。この手前の人がその支店長。…上司は取締役だから、この男の人(注。手前の男)は窮地に迫られている。覚悟を決めるといふ雰囲気というか…会社のためだったら仕方がないという…。結局は、警察に捕まる。自分だけが罪を背負う。
8 BM	………うーん、………あの、……この人は、前の晩に悪夢を見たわけ。…で、その悪夢を思い出している。その夢が後ろに背景みたいになって出てきている。…何か自分か誰か分からないんですけど、人が切り刻まれている夢。……夢だからきちんとしていないけど、銃が出てきたりして、…そういうバラバラにされるような夢を思い出したというか……。(T。バラバラにされる夢?)…夢だから、理由とか説明はいらんじゃないですか!(注。かなり強い口調)(T。自分がバラバラにされるということ?)…自分か、自分が別の姿になっているのか、他人か、他人であっても自分が乗り移った形の他人かもしれないし、そういうことで見ると、自分か他人か判断しづらい…。この人は15歳くらいの男の子かな。何か気持ち悪い感じですよ……。
10	………あの、………男の人が神父さんで、女の人是一般の人で、朝の礼拝か何かに来てる時に儀式みたいな形で、寄り添っている。その時にやるでしょ? 儀式っていうのか、何かやるでしょ? 自分も知らないけど、想像だからね。…そういう形で寄り添っている、挨拶的なもの。特に気持ちってないでしょうけど、…一応、教会へ来てるんで、神への感謝の気持ちを持ってるとはじゃないでしょうか。
11	………これ(注。橋の上の人)が人でね、原住民に襲われている。…一言で言えば、インディ・ジョーンズの世界。…宝物探しの冒険に出て、そこでの一場面。…原住民は5~6人が追いかけてる。…ここは滝みたいになってる。……何か古い宮殿。……地下に洞窟の、…フィンガルの洞窟って知ってます?(注。ここで、被験者は、メンデルスゾーンの作曲した「フィンガルの洞窟」という曲のことを話す。ヨーロッパのどこかにそういう名前の地下宮殿があると聞いたが、詳しくは知らないと言う。そうしたことを話してから、空想物語を続ける。)…で、そういう巨大な洞窟の中に宮殿がある所です。そういう所から脱出して、宝物を奪って、脱出して、それで追いかけてる。……その洞窟の中の宮殿は、構造がものすごく複雑で、宝物をひとつ取ると宮殿が崩壊する。宮殿が崩壊していく過程で岩がいくつも落ちてきた。ガラガラと岩が落ちてきて、崩れていく。…宮殿が崩壊すると、大きな空洞ができて、洞窟全体も崩壊する。中が不安定になって、それで、外側の岩石がどんどん崩れ出しているという、そんな場面……。うーんと、…その後は、国に帰って英雄扱いされるかな(笑い)。でも、原住民の方はこまるかな(笑い)、自分たちの宮殿が崩壊したわけだから。…これは、フィンガルの洞窟ではなくて、そんな設定をしたというだけで、やっぱり、エジプトか、いや、南アメリカにある洞窟でしょう。

齊藤：教師をナイフで刺した非行少年の人格査定

12 F	……………(長い沈黙)……………この場所は、イスラム圏なんです。どっちに設定しよう？ …イランでね。要するに、こちらの方はアジア系のイスラムの人で、こっちは白人のレポーター。本番前の設定で、イスラムの人が白人の姿かたちをもの珍しげに見ている。…何か報道特集か何かの本番前。…何かもの珍しそうに見ている。…後ろの人がもの珍しそうとか何かちょっと自分たちとは違うという目で見ているので、白人の方は緊張している。こういう人たちの中にひとりポツンと入っているの、緊張感とか不自然さを感じている。……報道番組のレポーターが、イランとか、戒律が厳しいイスラムの国に行っている。イランはシーア派ですよ。
13 B	……うーん……………浮浪児が座っている。浮浪児が、これ、見えるか見えないかですけど、ハーモニカを持っていて、吹いている。要するに「お恵みを…」って吹いている感じ、恵んでもらうために…。(T. どんな感じ?)何も考えてない、ただ食べることだけ…。(T. 浮浪児は何も考えていないの?)…母親が死んでいる…父親も酒飲みでね。要するに、幼児虐待をする親なんで、家出して浮浪児になったと。…その将来は、悪い仲間に入って、その中のボスになる。生きていくために、そういう形になる。考えてどうのこうのというんじゃなく、自然にそういう環境に巻き込まれていく。暴力団とか、だんだん不良仲間から発展して大きな組織に入って力を出して、最後はマフィアとか大きな組織のボス・クラスの人物になる。
13 MF	……………時代設定とかは、アメリカでね、1930年代。……………この人は有名な政治家でね、スキャンダルでね。この女の人は奥さんではなくて、愛人。そこへ報道陣が来て、バサバサッと写真を撮ってるんで、目を隠している。そういうスキャンダルの場面で、報道陣が踏み込んできたところ。…男の人は「しまった」というか「まずい」と、顔を隠して動揺している。女の人は「私、関係ないのよ」とみたいな形で、後ろ向いている。…その政治家は、政治生命を断られることになる。
15	……………(長い沈黙)……………この絵自体が絵である、つまり、ある芸術家の絵である。…つまり、芸術家が、精神疾患で入院中に描いた絵。その芸術家自身の美の感覚を写し出したもの。…亡霊めいたところがあるんですけど、その中に芸術家なりの美を出そうとした。顔とかは女性に見えないけど、姿は女性みみたいな形。…今、思ったのは、そういうミスマッチとか、醜い部分、亡霊めいた上半分の部分と美のコントラストを、女性の形で出そうとしている。顔の醜い部分と、女性の曲線の美とか、脚線美とかの、何と言うか、調和とか、そういうものを出している。
18 GF	……………この二人は母親と娘。……この娘がね、…親が決めた許婚(いいなづけ)がいるんだけど、その娘に、別に好きな恋人がいるんです。その男性と密会しているところを近所の人に見つけれ、近所のうわさになった。「恥さらしなことをした」といって、母親が娘をせっかんしてる。髪をつかんでせっかんしている。…母は、体裁が悪いとか、恥をかいたと。…娘は、どうしてこういう仕打ちを受けなければいけないのかということで、頭の中は、今、混乱してるでしょう。…えー……………この娘は、家出して、駆け落ちみたいなことをする。
19	…うん?…これ?……………(図版回転。長い沈黙)……………全く出てこない。…出てこない。……………部分的には、この部分は海で、ここは陸で、雪が降っている。他が説明できないんで、全体図が出てこない。…(T. 何か、どんな場面に見えるとか?)…嵐です。海がしけてるくらいだから、けっこうの嵐です。……………全体図が何か分からない。……半年間は雪の世界で、寒いところ。…何か雪の上にテントがあって、人がいるのかもしれないけど、いたとしても、少数、……………ちょっと頭が痛くなってきた…。
20	……この人は、戦後の復員兵で、街灯の柱にもたれかかって、…自分の家が焼けて、家の人や親戚とも連絡がとれなくなって、生きていいのか死んでいるのかも分からなくて、途方にくれている。……………(Q. 途方にくれて?)…飢え死にする。……どうしていいの分からない。生きがいもなくしている。……この風景自体が、この人の心境を表した風景になっている。

資料3-1 法務省式 SCT (青年用第1形式)

刺 激 語	反 応
こどものころ	おとなしかった。
友達はおたしを	変わっている人間だと思っている。
お父さん	はよくわからない。
私が知りたいのは	全てである。
よその家にくらべて私の家は	せまい。
夜になると	静かでよい。
働くこと	をしたことがないので、何も語れない。
私が好きなのは	学ぶこと。
職場がおもしろくないのは	と言われてもよくわからない。
このごろ私は	おちついている。
人にばかにされたら	気にしない。
お母さん	といわれてもよくわからない。
私は学校で	目立たない。
ひまな時	は本を読んでいるか音楽を聞く。
男の人	と言ってもわからない。
仕事がつらくなると	いわれてもわからない。
今でもはっきり覚えているのは	X先生の発言である。
家の人は	自分の頭の中にない。
私のとくいなこと	特にない。
おとな	いやらしく感じる。
おもしろくないとき	はそのことをなかなか忘れない。
近所の人	自分をよく見てくれている。
私の顔は	個性的でちょっと変である。
一番幸福なとき	自分が満たされているとき。
女の人	もよくわからない。
ここでは	いままで考えてきたことをまとめたい。
きれいなのは	人とつきあうこと。
私がひげめに思っているのは	言いたくない。
たくさんの人がいるとき	しんどい。
もし私が	なんて考える仮定的な考え方はしない。

引用文献

- 安立奈歩 1999 青年期の境界例心性に関する研究 心理臨床学研究, 17 (4), pp.354-365.
- 馬場禮子編著 1997 改訂・境界例：ロールシャッハテストと心理療法 岩崎学術出版社.
- 法務総合研究所 1999 犯罪白書平成11年版 大蔵省印刷局.
- 片口安史 1981 新・心理診断法第6版 金子書房.
- 村上宣寛・村上千恵子 1991 ロールシャッハ・テスト：自動診断システムへの招待 日本文化科学社.
- 斉藤文夫 1995 a TATによる非行少年の攻撃性に関する一考察 犯罪学雑誌, 61, pp.235-247.
- 斉藤文夫 1995 b TATの8BM図において冷情的攻撃空想を語る非行少年の諸特徴 犯罪心理学研究, 33 (1), pp.29-40.
- 高橋雅春・北村依子 1993 ロールシャッハ診断法I(第6刷) サイエンス社.
- 津田通夫 1963 m反応についての一考察：非行少年を対象として ロールシャッハ研究, 6, pp.98-105.
- 渡邊(高桑)和美・田村雅幸 1998 少年による殺人事件の特徴 所一彦ほか編 日本の犯罪学・第7巻 pp.268-272. 東京大学出版会.
- 山口悦照・浜孝明・西田太郎 1991 少年による殺人事犯 法務総合研究所研究部紀要, 34, pp.113-134.

2000年4月4日 受理